

気弱な教師が、勉強しなければいけないヤクザの家庭教師になり、いじめ問題に立ち向かう話

ヤクザヘツド

(15分)

大岡俊彦

原案・ほら

登場人物表

公男（30）

ひ弱で気弱な数学教師。

虎（35）

ガタイのでかいヤクザ。

アキラ（17）

金髪ヤンキーの問題児。

いじめられっ子

虎の事務所の若衆

アキラの継母

虎の思い人（写真のみ）

○南高校、外観

○同、教室

数学教師、公男（30）が授業中。

公男 「この式を因数分解しておくど、計算が簡単になります。そして：」

授業は誰も真面目に聞いていない。

後ろの席の金髪ヤンキー、アキラ（17）が前の席のいじめられっ子の背中を鉛筆で刺す。

痛がるが声を出さない。

アキラ 「早く大声出せよ」

何度も刺すが、いじめられっ子は耐えている。公男、それに気づく。

アキラ、睨む。

公男、びびって授業を続ける。

チャイム。

日直 「起立、礼」

いじめられっ子、助けを求める目。

公男 「：」

何も出来ずに教室を出ていく。

○ヤクザの車の中

運転する若手。助手席のヤクザ、虎

（35）は、何故か算数ドリルを勉強している。

虎 「ああーちつきしよう！ 何で算数は

こんなに難しいんだよおお！」

若手 「ちよ、煙草買って来ます」

道の真ん中で、何も考えず停車。

後続車、急ブレーキを踏むが追突。

その衝撃で、虎はフロントガラスに石

頭を強打（シートベルトはしていない）。

ビシリと割れるフロントガラス。

虎 「いっつってええええなコラ！」

○路上

その後続車を運転していたのは、公男だった。

前の黒塗り車から、ヤクザの虎が算数ドリルを持ったまま怒って出て来た。

虎 「降りろやコラ！」

引きずり出され、胸倉をつかまれる公男。

虎 「オレが石頭だったから良かったものの、落とし前はつけてくれるんだろうな！」

公男 「そ、そっちが道の真ん中で急に停まるから……」

虎 「アアア？」

公男、恐くてそれ以上しゃべれない。

虎、公男の車の助手席の教科書（数学など）を見る。

虎 「あ？　なんだオメエ先生か。先生が不祥事か！」

公男 「……ハイ：教師です……」

虎 「ありや何だ？　算数か！」

公男 「……数学です……」

虎 「丁度良かった！　先生ならこれ分んだろ！」

と、算数ドリルを見せる。

公男 「？」

× × ×

ベンツのボンネットの上で公男に算数を教えられ、問題を解いた虎。

虎 「なるほど！　流石先生！　よく分かったぜ！」

公男 「……はあ」

虎 「オレ、どうしても勉強しなきゃいけないくてさ！　家庭教師やってくんねえか！」

公男 「はい？」

虎、ジロジロとひ弱そうな公男を見る。

虎 「見た所ケンカ弱そうだからよ、代りにケンカ教えるってことでどうだ？」

公男 「そんなの、いいです」

一端は断わる公男。しかし思い直す。

虎 「？」

公男 「…ケンカ習ったら、自信がつかますか？」

○虎のヤクザ事務所、夜

虎 「先生！ よく来てくれた！」

おずおずと事務所に入って来る公男。
ビシッと迎える若衆たち。

あまりにも立派なヤクザ事務所なので、びびる公男。

虎 「まあまあまあ！ (と着席をうながす)」

若手 「お茶です」

公男 「ど、どうも…」

× × ×
ドリルを終えた虎。

虎 「流石本職！ 教え方うめえな！」

公男 「こんな熱心に聞いてくれる生徒も中々いないですけど」

虎 「そうか？ オレっちはよ、どうしても大学に入んなきゃいけねえんだ」

公男 「？」

虎 「先代の遺言ですよ。大学入らないと、跡目は継げねえんだよ」

公男 「はあ」

虎 「これからはヤクザもインテリの時代だって。大学出て法の目をかいくぐらねえと。それによ、プロポーズしてえ人がいるんだ(懐の写真を見せる)。この組のヘッドにならねえと、ケジメがつかねえ」

公男 「…はあ」

虎 「よし次だ！」

しかし、難しさにイライラする虎。

虎 「なんでこんなに複雑なんだよお！」
拳を突き出す虎、その先に公男。

クリーンヒットし、倒れる公男。

虎 「先生！ 先生！」

○翌日、教室

頬に湿布をしたまま授業する公男。
背後ではアキラがいじめを。

○夜、虎の事務所

虎 事務所内に吊るされたサンドバッグ。
「構えはこう。足はいつでも自由に動けるように。拳は軽く、殴る瞬間だけギョツと」

虎が手本。真似をする公男。
物凄い勢いでパンチを打ち込む虎。
ぺしょっと殴る公男。

虎 「悪くねえ。でも相手は動く」
サンドバッグを大きく揺らす虎。
タイミングを取れない公男。転ぶ。
笑う虎。

虎 × × ×
「ああ複雑ー！」
勉強しながら拳を振り回す虎。
今度は避ける公男。

○おでん屋台で飲む二人

虎 「しかし何で算数はあんなに複雑なんだよ先生ええ」

公男 「全然、複雑じゃないよ。学問は、複雑な現実を単純にする為にあるんだ」

虎 「ああ？」

公男 「たとえば音楽で和音ってあるだろ」

虎 「？」
公男 「ドミソの和音とか。三つの音を同時に出すと、響きが綺麗ながある。でも好きな音を三つデタラメにやっても汚くて、特定の音の組み合わせだけ、響きが良くなるんだ」

虎 「なんでだ？」

公男 「割算やってるだろ」

虎 「ああ」

公男 「音は数字に対応してる。三つの音が割り切れる時だけ、和音になる。それ以外

は汚いんだ」

虎 「まじでか！」

公男 「これは、二千年前、ギリシャ時代に分ったこと」

虎 「まじでか！」

公男 「現実はとても複雑だ。けど、時々シンプルになる。数学や学問は、現実をシンプルにする為にあるんだ」

虎 「まじでか！」

公男 「：ぼくには、ケンカの方が複雑だけどね」

虎 「(一杯飲んで)ケンカにもあるぜ。シンプルにするやつ」

公男 「？」

虎、おでん屋台の柱に頭突き。

ガンッてすごい音。

公男 「：痛くないの？」

虎 「痛えよ。でもな、自分の一番大事な所を、相手の一番大事な所にぶつけるんだ。大事な所が強え方が勝つ。シンプルだろ？」

公男 「：：：それ、教えて」

○事務所で頭突きの特訓をする二人

○校舎裏

公男に呼び出されたアキラ。

アキラ 「何だよ」

公男 「：一番大事な所から、言う。：いじめを、やめろ」

アキラ 「ハア？ (拳を振り上げる)」

公男 「(ビクッとビビる)：いじめを、やめろ！ お前は算数から分ってないから暇なんだ！ だからいじめをするんだ！

ぼくが家庭教師するから、いじめを、やめろ！」

アキラ 「ハア？」

アキラ、公男を蹴る。

公男、頭突きしようとするが外す。

アキラ、殴る。倒れた公男を蹴りまく

る。

○虎の事務所、夜

包帯を巻いた公男。顔中腫れている。

虎 「…なっさけねえなあ」

公男 「…防御を、習ってなかった。教えてくれ」

虎 「そんな糞ガキほっとけよ。どうでもいいだろ」

公男 「どうでも良くない。アキラは家庭が複雑なんだ。父親が再婚して、継母と暮らしてる。だから家に帰らなくて、変な奴らとつるんでるんだ」

虎 「…複雑だな」

公男 「そうなんだ。…現実の方が、数学よりよっぽど複雑なんだ」

虎 「(立ち上がって)構えろ。こう来たらこうよけるんだ」

○特訓する二人

○河原

アキラ、公男、虎。

アキラ 「なんだよヤクザ連れて来て！ 復讐かよ！」

虎 「俺は立会人だ。手は出さん」

アキラ 「馬鹿馬鹿しい！ 帰ろうとする。」

虎、銃で足元を撃つ。
ビビるアキラと公男。

虎 「男が男と話そうとしてんだ。聞いてやれ」

アキラ 「…」

公男 「…あのさ、複雑な家庭事情は分る。でもな、シンプルに、『かあちゃん』って呼べばいいんじゃないかな？」

アキラ 「ハア？」

公男 「それで、いじめもやめてくれ」

アキラ「アホか！」

殴りかかるアキラ。全部よける公男。

虎 「いいぞ先生！ そこだ！」

練習通り懐に入る。

公男 「うあああああ！」

ゴーンッ。渾身の頭突き一発。

ダウンするアキラ。

額から血を流す公男。

公男 「いてえ。いてえ。…いてえ」

虎 「わははは。勝ったな、先生！」

アキラ、地を這いつくばり、公男を見る。

公男 「(頭を押さえながら) 頭は…シンプ

ルにする為に使うんだ！」

アキラ「…」

公男 「あと…いじめてた奴にも、あやまれよ…」

公男もひっくり返る。

○後日、教室と廊下

授業をする公男。額には包帯。

遅刻して来て、廊下から先生を呼ぶア

キラ。廊下にはアキラの継母が。

アキラ「先生、紹介するぜ。…うちの…かあちゃん」

公男、びっくり。丁寧に礼をする継母。

アキラ、席につく。前のいじめられっ

子に、あやまる。

アキラ「俺、もういじめない。すまなかった。

あとで、殴った分殴ってくれ」

虎 「よく言ったぞ！ お前、男だ！」

その声に振り返ると、一番後ろの席に学生服の虎が！

アキラ「げっ！」

虎 「よう！ 俺、中学の数学はもう終わ

ったからな。生で先生の授業聞くには、こ

こが一番シンプルなんだぜ！」

アキラ「…」

虎 「校長に一発頭突きかましたら、入学

許してくれたぜ？ 頭は、答えをシンプルにする為に使うんだよ。な、先生？」

アキラ、公男の顔を見る。

公男 「（額の傷を触って）…ハイ」
三人、笑う。

○タイトル 「ヤクザヘッド」